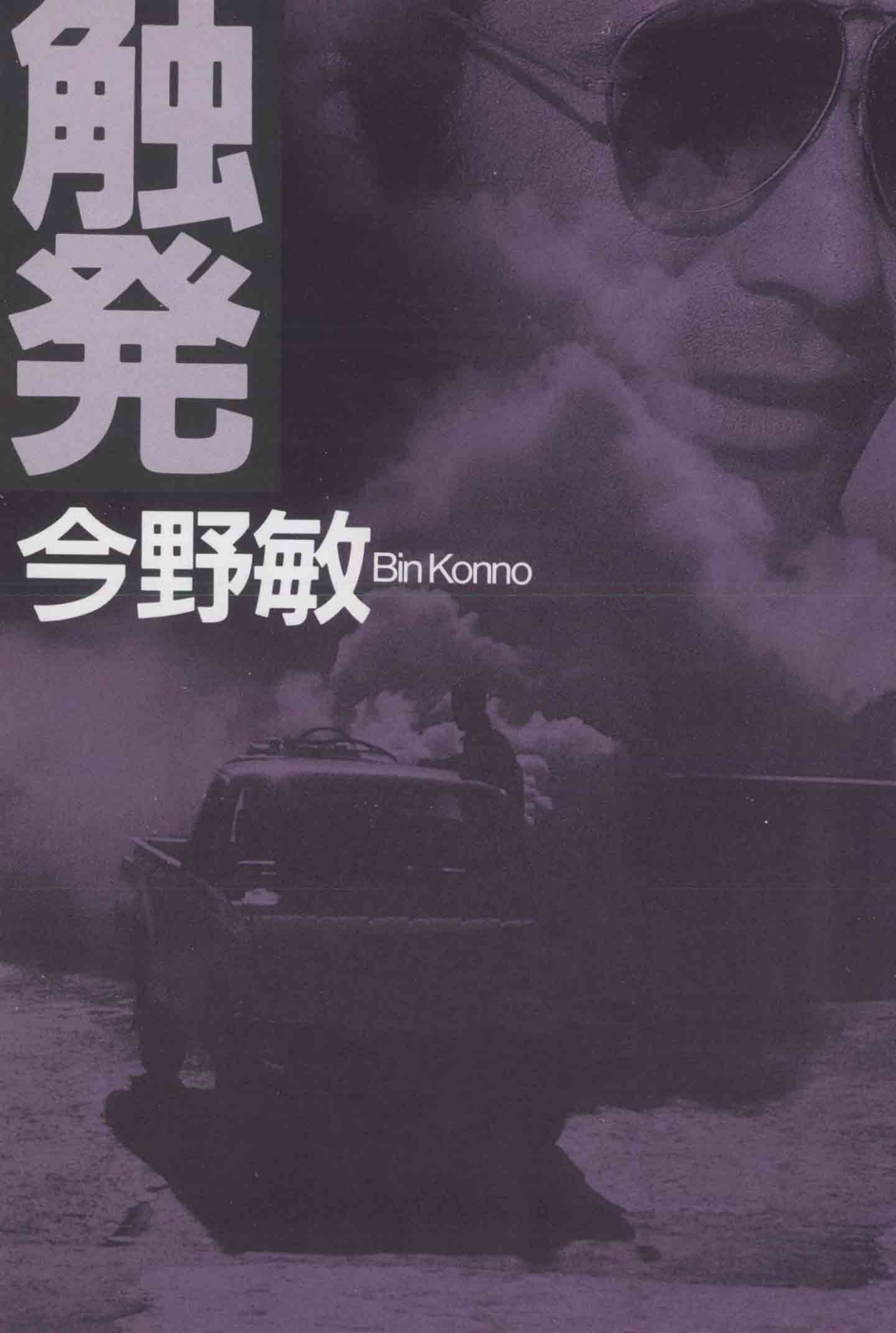
触発
Bin Konno
今野敏

触発

今野敏 Bin Konno



触発

一九九六年九月二五日初版発行
一九九六年一〇月二五日再版発行

著者　今野敏
発行者　嶋中鵬二
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
電話　販売部〇三(三五六六)一四三一
編集部〇三(三五六六)三六六四
振替　〇〇一二〇-四-三四

印刷　図書印刷（本文）
大熊整美堂（カバー・表紙・扉）
製本　小泉製本

Printed in Japan CHUOKORON-SHA,INC.
©1996 Bin KONNO
ISBN4-12-002609-4 C0093

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

触

発

装丁　辰巳四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

「清水、帽子が曲がってるぞ」
原田に指摘され、清水博は若草色の帽子をかぶりなおした。彼は、もう少しで不服そうな表情をするところだった。原田は、彼の上司だ。鉄道の世界では、直属の上司を師匠と呼んだりもする。
営団地下鉄にもそれに似たような習わしが残っていた。
清水は、その制帽が気に入らなかった。円筒形の帽子はまるで遊園地の職員がかぶりそうなデザインなのだ。
気に入らないのは帽子のデザインだけではない。きつい仕事にもうんざりしている。鉄道職員の使命は、安全と正確だ。それはわかっているのだが、清水博はどうしても仕事に誇りを持つことができずにいた。まるで、時計に操られているような気がする。
就職した当時はそれなりにやる気もあった。要するに飽きてしまったのだ。彼は、まだ二十五歳で、ほかの職業で才能が生かせるような気がしていた。
さらに今日は、嫌な知らせがあり、彼は異様に緊張していた。
営団地下鉄霞ヶ関駅は、これからラッシュを迎えようとしている。彼は、日比谷線のホームに

いた。電車が来るたびに安全確認を行う。かつては、緊張したものだが、最近ではすっかり慣れきっており惰性で体が動いているようなものだった。

「変な鞄が置いてあるんですけど……」

中年女性の客が原田にそう言っているのが聞こえた。そのとたんに、清水はひどく嫌な気分になった。

まだ、地下鉄サリン事件の記憶は生々しいというのに、また……。

中年女性は、眉をひそめている。彼女も地下鉄サリン事件を思い出しているのかもしれないと清水は思った。

「俺、見てきましょうか？」

清水は原田に言った。

「いや」

原田も表情を曇らせている。「私が行く……」

原田が詰所を出たとき、また日比谷方面の電車がやってきた。清水は安全確認に出た。電車から乗客が吐き出される。この時間帯は着く電車ごとに降りる客が増えていく。原田は、ホームに降り立った客があらかた出口に向かって去ってから問題の鞄に手を触れた。

清水はその様子を遠くから眺めていた。

原田は充分に注意していた。ホームがすくまで待っていたのは、万が一のときの被害を最小限に食い止めるためだと清水は悟った。だが、ホームには乗車客もおり、すぐに次の電車がやってくる。

清水は苛立った。

（何やってんだ。警察に任せればいいだろう。俺たちの役割じゃない）
原田は、まだ鞄を持ち上げようとしなかった。神谷町方面の列車がやってきた。
原田は、その客がホームにあふれないうちに鞄を移動しようと決めたようだった。鞄の取っ手を握る。変哲のない黒い小型のボストンバッグだった。
清水は、原田がその鞄を持ち上げるのを見ていた。
その瞬間に、彼は視界の中がまばゆく光るのを感じた。
天井と床がひっくりかえる。全身にひどいショックを感じていた。
何が何だかわからないうちに、彼はひどく固いものに叩きつけられていた。
清水は、一瞬のうちに意識が吹き飛んでいたが、そのごく短い間に信じがたいほど多くのことを経験していた。
まず、熱風の固まりを全身に浴びていた。彼は吹き飛ばされながら大火傷を負っていたのだった。
これまで聞いたことのない大音響のせいで、彼の鼓膜は両方とも一瞬にして破れていた。
さらに彼は宙を飛ぶ浮遊感を経験していたし、続いて壁か床に叩きつけられる苦痛も経験していた。
だが、最も恐ろしかったのは、最初の瞬間だった。彼は、鞄が爆発して原田がばらばらに吹き飛ぶところをたしかに見たのだった。それは、意識には昇らなかったかもしれない。
見たと認識する前に、吹き飛ばされ、どこかに叩きつけられたのだ。だが、彼の潜在意識の奥深くにはその様子が刻み込まれたはずだった。

ホームに向かっていた神谷町方面の列車は、爆発を察知し、緊急停止していた。だが、そのときには、すでに、爆風により運転席のガラスは吹き飛んでいた。運転手は、その破片を浴びて全身がずたずたになり、さらに窓から吹き込んできた爆風で後方の戸口に叩きつけられた。

各車両の窓ガラスも粉々になっていた。爆風と衝撃波のせいだった。

閉鎖された地下鉄のホームで爆発が起こり、そのエネルギーは、逃げ場を求めて暴れまわった。衝撃波と爆風は、地下鉄のトンネル内を一瞬のうちに駆け抜け、すさまじい被害をもたらした。乗客は、飛び散った窓ガラスの破片によって怪我をし、緊急停止の衝撃で将棋倒しになって怪我をした。すでにラッシュ時だったため、車内は混み合っていた。

乗客たちは、パニックを起こし、それがまた怪我人を増やすことになった。

ホームの惨状は、近づきつつあった列車の中どころの騒ぎではなかった。

原田のすぐそばには、金属製の脚のついたプラスチックの椅子が並んでいたが、それがすべて吹き飛んでいた。

金属製の脚も、あるものはひしゃげ、あるものはちぎれて吹き飛んだ。そのプラスチックの椅子や金属の脚が恐ろしい凶器となった。

ホームに佇(たたず)んで列車を待っていた学生は、猛烈な勢いで飛んできたプラスチックの椅子に頭の半分を持っていかれて即死した。

爆心に近い場所にいたOLは、四肢が完全にばらばらになっていた。つけ根からちぎれた大腿に融(と)けたストッキングがへばりついている。

ホームの端にいた中年サラリーマンは、線路を飛び越して向こう側の壁に叩きつけられてい

た。トマトを壁に投げつけたようだった。つぶれたサラリーマンの全身から血が吹き出し壁に大きな染みを作った。
立っている者は誰もいなかった。ホームは、ほんの一瞬だけ静寂に包まれた。

奇跡的に清水は意識を取り戻した。だが、身動きすることができない。全身打撲で体がいうことをきかない。
何カ所も骨折しているようだ。
清水は、何が起こったのかまったくわからずにいた。頭がまったく働いていない。認識を拒否しているようだった。
手に何かが触れているのに気づいた。
首だけなんとか動かしてそちらを見た。誰かの手が触れている。
清水は、反射的にその手を握ろうとした。誰かが助けに来たのかもしれない。
しかし、何かが妙だった。
清水の頭は朦朧(もうろう)としている。視界も霞んでいる。
やがて、何が妙なのかに気づいた。その手の先には何もなかった。
当然あるべき前腕、二の腕、そしてその手の持ち主の顔……。
手首からちぎれて吹き飛んだ手が、清水の手の上に乗っていたのだ。
清水は、誰かが叫んでいるのを聞いた。それが、自分の叫び声であることに気づいたのは、意識が再び途絶える直前だった。

電話が鳴り、碓氷弘一は舌打ちした。
まだ七時を過ぎたばかりだ。まだ、日勤の連中は出てきていない。
「はい、警視庁捜査一課」
碓氷は電話を取り、言った。
悪い予感がしていた。こんな時間に来る電話は事件と決まっている。その予感は当たった。
「霞ヶ関で爆発？　被害状況、不詳……。死傷者多数の模様……」
通信司令室からの連絡だった。それを復唱しつつ、碓氷は、後頭部を殴られたような気がしていた。自動的にメモを取っていたが、実は別のことを考えていた。
電話を切った碓氷は、しばし呆然としていた。彼は、もう一度舌打ちをすると、当直の役割をこなしはじめた。
一課長、理事官、第一係の係長らに連絡をする。さらに、碓氷は、他の当直と打合せをして現場に出掛ける準備をした。
その間も、昨夜の電話のことが気になりつづけていた。
（ちくしょう……。よりによって、俺の当直のときにな……）
昨夜、遅くに怪しげな電話があった。
爆破予告だった。
「地下鉄霞ヶ関駅を明朝八時に爆破する」
電話の主はそう言った。
予告より一時間近く早いが、それが現実となってしまった。
もっと本気で対処していれば……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

碓氷は思った。
警視庁にいると、どうしてもこうした情報に無頓着になってくる。ガセの電話が日常だからだ。
予告電話を受けてすぐに碓氷は、いちおう所轄署である麹町署に知らせた。麹町署では、その段階で、地域係の外勤警官を派遣して駅の中を捜査した。
昨夜の十二時三十分ころのことだ。
不審物は見つからなかった。おそらく、麹町署では夜が明けてからもう一度捜索するつもりだったのだろうと碓氷は思った。
碓氷は、そのままそのことを忘れていた。本気になって、駅を封鎖し、徹底的に捜索していれば、こんなことにはならなかったかもしれない。
後悔していた。
(俺の経歴に傷がついたぞ……)
碓氷は、悔やんだ。(責任を追及されるかもしれんな……)
四十六歳になる碓氷は、部長刑事だった。出世は早いほうではないが、これまで特に問題を起こさずに刑事稼業を勤め上げてきた。十歳の娘と七歳の息子がいる。このまま、定年までおとなしく勤めることだけを考えていた。
思わぬところに問題が待っていた。たった一本の電話の処理を誤ったことで、碓氷はつらい立場に立たされることになったのだ。
(どうして、よりによって俺の当直のときに……)
碓氷は口に出して毒づきたい気分だった。爆弾をしかけるという凶悪な犯罪に対する憎しみよりも、自分に責任を負わせたという恨みがましさのほうが強かった。

もうじき日勤の連中がきて、当直明けになるはずだった。だが、それまで待っているわけにはいかない。初動捜査を機動捜査隊と所轄署にまかせようとも思ったが、事件の規模の大きさと凶悪さを思うとそれもできなかった。

碓氷は、裸足にサンダルだったが、靴下を履き、靴を履いた。外してあったネクタイを締め、背広を手にした。

（せめて、現場に出向かなけりゃな……）

碓氷は思った。（あとで何を言われるかわからない）

地下鉄霞ヶ関駅の周辺は、パトカー、消防車、救急車でぎっしりだった。消防士やレスキュー隊員、救急隊員それに制服警官たちが慌ただしく現場を走り回っている。

軽傷の乗客たちが歩道に並べられている。彼らは、みなぐったりして見えた。顔色がひどく悪い。

皆血を流しており、衣服が破れている。紛争地帯の爆撃後の映像を見ているようだと碓氷は思った。

すでに現場付近はロープを張られ封鎖されている。

碓氷は白い手袋をして、ロープのそばにいる若い警官に近づいた。警察手帳をその警官に掲げる。

警官は、敬礼をした。碓氷はその警官に話しかけた。

「ひでえありさまじゃねえか……」

「ええ……」

若い警官は、顔色を失っている。緊張のせいだと碓氷は思った。
「でも、中はもっとひどいですよ……。まるで、地獄です」
「おめえさん、地獄なんて知ってるのかい？」
「いえ……、その……、単なる比喩です」
なるほど、警官の顔色が悪いのはそのせいか、と碓氷は納得した。
「しかし、この様子を見ていると、サリン事件の再現のようだな……」
碓氷はロープを潜った。
「はい……。でも、現場、見るとわかりますけど、あのときよりずっと被害は大きいですよ」
碓氷は溜め息をついた。
「そうだろうな……」
警官のもとを離れ、地下鉄の入口に向かった碓氷は、何度も救急隊員や消防士とぶつかることになった。
作業中の彼らと体もぶつかり合ったが、意見もぶつかった。
現場検証などあとにしてくれというのだ。今は、生存者の救出が第一だという。
彼らの言い分ももっともだが、他人の立場など考えていたら警察官はつとまらない。碓氷は、彼らをおしのけて、階段を下った。
それまで、所轄署の刑事や機動捜査隊は駅の外で様子をうかがっていたが、彼らも碓氷の姿を見て次々と階段のほうへやってきた。すでに、新聞記者やテレビの取材陣もかけつけている。
空には何機ものヘリコプターが飛び交っていた。
地下鉄の最初の階まで降りると、若草色の帽子を被った地下鉄職員と消防士が何事か話し合っ

ていた。
捜査陣を引き連れる形になった碓氷は、そのふたりに近づいた。
「現場は？」
地下鉄職員と消防士は同時に碓氷のほうを向いた。碓氷は、警察手帳を掲げていた。
消防士が目をむいた。碓氷よりも十歳は若そうだった。
「あんたは、この状況が見えないのか」
消防士は、必死に構内を駆け回る仲間のほうを指さした。
「見えている。現場はどっちだ？」
「現場検証なら後にしてもらう。外に出ていてくれ」
「あんたにはあんたの仕事がある。俺には俺の仕事があるんだ」
「まだ生存者がいるかもしれない。邪魔をしてもらいたくない」
碓氷は、爆破予告のせいで引くに引けない気持ちになっていた。ここでぐずぐずしていたら、後の周囲の評価はさらに低くなりそうな気がしたのだ。
「これは単なる事故じゃない。爆弾が仕掛けられたんだ。その証拠を見つけなきゃならない。あんたらが引っかき回して大切な証拠を台無しにしちまうかもしれないんだ」
消防士は地下鉄職員のほうを向いた。地下鉄職員はうなずいてみせた。
「爆破予告のことは聞いている。だが、そんな予告があったのなら、どうしてもっと早く手を打たなかったのだ？」
消防士に痛いところを衝かれて、碓氷はついかっとなった。
「ちゃんと所轄署が捜索をした。あんたにそんなことを言われる筋合いはない。俺たちは犯人を

つかまえなきゃならない。でなきゃ、第二、第三の事件が起きるかもしれないんだ。それを防ぐのが俺たちの役割だ。現場はどっちだ」

地下鉄の職員が言った。

「日比谷線のホームです」

碓氷はうなずいてそちらに向かおうとした。そのとき、地下鉄の職員が言った。

「私もひとこと言っておきたい。どうして警察は、もっと本気で対処してくれなかったのですか」

碓氷は、立ち止まったが、何も言わずにまた歩きはじめた。

ひどく腹立たしかった。当直明けで疲れており、誰かに当たり散らしたい気分だ。

(くそっ。この中年太りで頭が薄くなった俺に、いったい何をどうしろと言うんだ)

地下鉄霞ヶ関駅では、丸の内線と千代田線が平行に走っており、それをつなぐ形で日比谷線が交わっている。したがって、日比谷線は、丸の内線と千代田線の間に横たわっていた。

ホームに足を踏み入れたとたん、怒りが消し飛んだ。

これまでひどい現場はいくつも見てきた。火事場の検証に出向き、焼死体を何度も見たことがある。

列車事故の検証では、バケツに集められた肉片を見たこともある。かつて人間だった肉の塊りだ。

だが、これほどすさまじい現場を見たことはなかった。

ホームにはまだ火薬の臭いのする煙がたなびいていた。爆発で空調をやられたせいだ。換気が充分ではないのだ。

駅員の詰所のガラスはすべて吹き飛んでいる。一面血だらけだった。
一部、天井が崩れているところがある。そのあたりが爆心かと碓氷は思った。
だが、太いホームの支柱はそのままだった。施設の損害は思いのほか少ない。ただ、ホームにいて無事だった人間はひとりもいなかっただろうと思った。
おびただしい血がそれを物語っている。
碓氷は呆然と立ちすくんでいた。地下鉄職員や消防士の怒りの理由がようやくわかったような気がした。
そして、彼は取り返しのつかない失敗をしたのではないかという思いにさいなまれていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com